

2022年11月13日 礼拝説教要旨
詩編講解説教127「救いが訪れる家」
詩編127：1～5、ルカ19：1～10

冒頭「主御自身が建ててくださるのでなければ家を建てる人の労苦はむなしい。主御自身が守ってくださるのでなければ、町を守る人が目覚めているのもむなしい」（1節）とあります。「家を建てる」「町を守る」これは職業であり、ここでは人間の営みとしての仕事、労働について言われています。「朝早く起き、夜おそく休み、焦慮してパンを食べる人よ。それは、むなしいことではないか。主は愛する者に眠りをお与えになるのだから」（2節）朝早く起き、働きに出て、家に帰って夜遅く眠る。これも労働者の一日のサイクルです。

「見よ、子らは主からいただく嗣業。胎の実は報い。若くて生んだ子らは、勇士の手の中の矢。いかに幸いなことか、矢筒をこの矢で満たす人は、町の門で敵と論争するときも恥をこうむることはない」（3～5節）ここでは「子ら」子どもたちが出てきます。これは家庭のことと捉えてよいでしょう。「矢」が子どもに喩えられています、子どもが与えられることがいかに心強いかということを示しています。「矢」は戦いの道具ですが、それで助けられる。矢で矢筒が満たされていけば心強いし、反対にないと心細い。子どもはそういう存在であるということです。実際、子どもに助けられることがあります。お子さんに支えられて教会に来られる方々もいらっしやいます。

そのように第127編は「仕事」と「家庭」というわたしたちに密着した事柄が取り上げられています。この詩編も巡礼の歌ですが、巡礼者たちもまた家に帰れば、仕事が待っている、家族が待っているわけで、わたしたちと何ら変わることはありません。何のために彼らはエルサレムを目指して巡礼するのか。それはむしろ帰ってからの仕事のためであり、家庭のためです。わたしたちもそうです。わたしたちは何のために日曜日に礼拝をまもるのか。それは明日から始まる仕事のため、また家庭のためなのです。日曜日の礼拝はわたしたちの日常と無関係なことではありません。むしろここにすべての源泉がある。それは素直に信じてよいことです。

しかし、どうもわたしたちは信仰と仕事、信仰と家庭、これを切り離してしまうことがあります。神さま抜きで仕事を考える。家庭を考える。そうすると人間の業のみで完結しているような錯覚に陥ります。自分が働いて稼いでいる。自分が家庭を作っている。すべては自分にかかっている。でも果たしてそうでしょうか。仕事もいつでも成功するものではありません。何より健康がなければ働けません。その健康は誰が与えてくださるのでしょうか。ときに失敗することもあります。それをフォローしてくれる仲間、良い職場、その環境は誰が与えてくださるのか。家庭もそうです。結婚したら常に子どもが与えられるとは限りません。何より子どもは神さまからの授かりのものであり、自分たちが作るものではないのです。

確かに人間の努力の一面もあるでしょう。勉強して、スキルを磨いて、就活をして念願の企業に就職する。成功もその陰で努力する自分があったからだと多くの人たちは考えます。結婚も婚活をして、自分で理想の相手を見つけたと思うでしょう。苦勞して子育てをするでしょう。でもその背後にもやはり神さまの深いご計画がある。信仰のない人たちはそれを「運」という言葉で片付けてしまうかもしれませんが、わたしたち信仰者はそこに神さまの関わりをみるの

です。その信仰が「主御自身が建ててくださるのでなければ家を建てる人の労苦はむなし」（1節）という言葉の中に込められています。神さまの導き、介入を信じるのがわたしたちの人生をより豊かで確かなものにいたします。そうでなければ、結局わたしたちは何のために労苦して働くのか。何のために結婚して子育てをするのか。その意味を見失うことになります。それは必然的にむなしさを生じさせます。「朝早く起き、夜おそく休み、焦慮してパンを食べる」それだけの人生のような感じがして、ある日突然空しさに襲われるのです。これは恐ろしいことです。これが信仰と仕事、信仰と家庭を切り離した状態です。またこれを人間の業の中に押し込めてしまうときに、それは神さまの栄光を曇らせるものになってしまいます。それが今日の過労死の問題。家庭で言えば、DV、幼児虐待などの問題を生み出していることに気付かなくてはなりません。

今日は幼児祝福があります。これもただ子どもの成長を喜び感謝するだけではなく、神さまの祝福を祈り求めるときに、親は子どもを神さまの関わりの中で見ることができます。そうでなければ、親は子を自分の所有のように考えて、自分の思い通りにしようと思うでしょう。親が支配してしまう。それは大変不幸なことです。神さまの祝福を求めるときに、親は自分の狭い価値観、思いから自由になり、子もまた自由にされるのです。

神さまの介入の出来事は、何よりイエス・キリストによって示されました。今日はルカ福音書のザアカイの話を読みました。ザアカイは自分の力で昇り詰めようとしていました。それが木に登るという行為に象徴的に表されています。でも結局ザアカイは不正を働くことでしか自分を高めることができませんでした。そこに人間の限界性があります。けれども主イエスがザアカイの家を訪れ、ザアカイの家は変わりました。「今日、救いがこの家を訪れた」と主イエスは言われます。神さまの介入によって、その家は祝福されます。キリストによって贖われ、赦された人生は、そこに新しい家庭、祝福された労働をもたらすでしょう。

改めて、この詩が巡礼の歌であることを思い起こします。巡礼者たちも仕事で悩み、子育てで悩みながら、巡礼の旅を続けていたかもしれません。でもエルサレムに巡礼にきて、そういう思い煩いを神さまに委ねる。それを一旦手放し、神さまにお返しすることで、また新たな気持ちで仕事に、家庭に帰っていくことができたのではないのでしょうか。わたしたちの日曜日の礼拝も同じです。信仰の視点を持って、神さまの赦しと憐れみの眼差しの中に仕事、家庭を見つめ直していく。その作業がなければわたしたちは行き詰まってしまいます。救いがそれぞれの家庭に、日々の勤めに訪れるために、今日もわたしたちは神さまのもとに集います。